# 願成寺報

平成三十年三月十日

〒四四〇・〇八一二　豊橋市東新町二十八番地
☎ 〇五三二・五二・九六〇

## ■ 春季彼岸・永代経のご案内

今このままを慶ぶことが　仏様への報恩です
そのままの慶びを　ご一緒に　見つめ直しましょう

## ○餅つき・草取り会

恒例になりました。
つき立てのお餅をオヤツにします。
だんだん仲間が増えてきました。
楽しいです。
是非、ご参加下さい。

| | | |
|---|---|---|
| 三月　十九日（月） | 午後一時 | 餅つき・草取り会 |
| 二十日（火） | 午後一時半 | 法要のみ |
| 二十一日（祝） | 午前十時 | 法要・落語、法話<br>成田屋紫蝶 師、住職 |
| | 正午 | お斎（昼食） |
| | 午後一時 | 法要・落語、法話<br>成田屋紫蝶 師、住職 |

## 大乗菩薩道～他利利他の深義～

―皆が地獄に堕ちていくとき、独り天国へ召されて幸せだろうか
―天国と極楽は似ているが、浄土はイメージが違うな…
等と考えていたら『大乗菩薩道』に思い至りました。
自ら励んで徳を積み、私心なく、その徳で他を利する『自利利他』の実践が大乗菩薩道だと教科書にあります。
けれど、そんなの無理な私には、もう一つの菩薩道が示されます。
阿弥陀仏によって自利利他は完成している。その仏を仰ぎ、利せられている事実に頷きながら、頷く姿で他を利していく『他利利他』の仏道が浄土真宗です。
この『自』の文字が消えた、自他の境を超えさせる仏道こそ、得道の実感のある『真実証』の仏道だと思います。
他を退ける我利によって孤独となる世界を地獄と呼ぶのでしょう。
ならば、自らを退け、他と学び合う世界が浄土なのだと思います。
けれど、この自らを退けることが難しい。
問題は単純かつ明快なのに応えることが出来ません。
ただ、地獄の中に浄土を開いていく課題だけは整理できました。

自利利他円満シテ　帰命方便巧荘厳
ココロモコトバモタエタレバ　不可思議尊ニ帰命セヨ
《讃阿弥陀仏偈和讃・親鸞聖人》

**成田屋紫蝶 師**
（なりたや しちょう）

豊橋天狗連の大御所
5年目のご出演です
とても楽しいです

「落語は業の肯定である」立川談志

裸になれば 猿の…
毛が抜けただけの私達

その悲しい現実を
笑い飛ばして
受け入れて
慶び直せたらいいですね

お寺で落語

皆様 大入りのほど
宜しくお願い
申し上げます

# ●正信偈ノート　㉑・道綽章Ⅱ

書き直しを恐れず、今、思い浮かぶところを書き留める

黄色の勤行本の
三十六ページから

**三不三信誨慇懃　像末法滅同悲引**
**一生造悪値弘誓　至安養界証妙果**

三不三信のおしえ慇懃にして、像末法滅おなじく悲引す。
一生悪を造れども弘誓にもうあいぬれば、
安養界に至りて妙果を証せしむといえり。

〈浄土真宗本願寺派・注釈版聖典より〉

・三不三信誨　天親菩薩は弥陀を感受する信心を一心と顕した
曇鸞大師は一心でない信心を三不信と分析した
道綽禅師は一心に向かう三信を提唱した
・相続心　本願のいわれを聞き　よく称名すれば
・一心　往生浄土の確信が持て
・淳心　自力の疑い心がなくなる

・像末法滅　釈尊が自身滅後の仏教の衰退を予言した〈大集月蔵経〉
・正法時　五百年　教行証の具わる　覚者のある時代
・像法時　一千年　教行のみの　覚者のでない時代
・末法時　一万年　教のみで　仏道修行が不可能な時代
・法滅時　その後　教も竜宮にかくれてしまった時代
法滅時であっても弥陀大悲の働きはなくならない

・安養界　弥陀大悲の浄土
・妙果を証す　法悦の中で仏道を成就する身となっていく

**・悪人凡夫 ―溺れる者としての自覚―**

道綽禅師は末法五濁の世に溺れている自覚を持ち、自力聖道門の無効を深く見つめた人でした。安楽集に龍樹菩薩の譬を引用して戒めます。

「たとえば、四十里の氷に一升の熱湯をかけて少し解かしても、夜の冷気にあえば熱湯分大きな氷塊となってしまう。凡夫が穢土にあって苦を救うも、斯くの如し。些細なことで貪・瞋の煩悩が起こり、返って悪道に堕するがゆえなり」「もし凡夫発心して、すなわち穢土に在りて衆生を救済せんと願わば、聖意許さず」と。

功を競い、自己主張をしなければ敗者となってしまう時代社会の中で、私心なく他を利していくことは不可能です。行為を善行だと思った瞬間から、評価報酬褒美の計算を始めます。だから真の善人たる自力聖道門の仏道は完全に閉ざされているのです。

凡夫のみの世界で自らの凡夫性を自覚することは不可能です。凡夫性への目覚めは、仏が働いた証拠です。罪悪深重・煩悩熾盛の凡夫と泣く人は、既に他力浄土の門をくぐっているのです。

**・特留此経止住百歳**

「当来の世に経道滅尽せんに、われ慈悲をもって哀愍して、特に止住すること百歳せん。それ衆生ありてこの経に値ふものは、意の所願に随ひてみな得度すべし」〈仏説無量寿経・下〉

万人に開かれた他力浄土の念仏道は、他の経道が滅尽した後も留めおかれると示されます。百歳は満数で永遠の意味だとか。けれど私は百歳を限度とした人の生涯を想います。

穢土で同様に悪に染まっている人々。自らを善人とせず、その迷いの姿に学ぶのならば、自他の境を超えて、共に浄土を願う心が起こる筈です。そんな根源的な所で相続されていく仏道が念仏道だと思います。念仏の法は、人の身体の中に止住されたと思います。

**・後に生まれん者は前を訪え**

「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海を尽くさんがためのゆえなり」〈安楽集・上〉

親鸞聖人も教行証文類に引用した文章です。穢土で迷いのまま導き合えるところが要です。

## 創作・周利槃特（しゅりはんどく）の輝き

「かぐわしい香りの真紅の蓮華が　暁に花開いて香るように
あまねく照らすブッダを見よ。空に輝く太陽のように…」
槃特はこの句を四か月間読み続けたが暗記できなかった。
仏弟子に誘った兄は、槃特を見捨てて教団から追い出した。
釈尊は槃特を呼び戻し、金襴の美しい布の詰まった箱を探して、
どこにでもある白い布と覚えやすい簡単な句を授けた。
「塵を払い、垢を除け」
槃特は、この句を唱え、精舎の隅々・近隣の村まで雑巾がけした。
愚鈍の姿に子供達は石を投げ、仏弟子達も呆れ嘲笑った。
歳月が経ち、人々は気がつき始める。
槃特の掃除の跡が輝いている。
それは真似の出来ない事だった。
女達は槃特に愚痴や悩みを打ち明ける。
槃特ならば直ぐに忘れる、だから安心だった。
槃特の応えは決まっていたが、なぜだか癒された。
「塵を払い、垢を除け」
槃特はときどき釈尊の所に雑巾の交換に行った。
「何かを清めることと、自らが汚れることは等しいか？」
「雑巾においては等しい。そして金襴には出来ない仕事だ」
「聖者よ、其方の仕事は智慧第一の舎利弗にも劣らない」
キョトンとする槃特を釈尊は抱いた。
槃特は神通説法第一の尊者と称せられるようになったが、
槃特の姿は変わらなかった。
「塵を払い、垢を除け」
「塵を払い、垢を除け」

〈『ブッダとその弟子 89 の物語』法蔵館、他より創作〉

## 雑学・人間到る所青山あり

左遷されて失意の同僚に、送別会などで贈られる言葉です。
「人間（じんかん）」は人の住む所、「青山（せいざん）」は墓の意味です。
「何処に行っても墓だらけ」で励ますのは… どうなの？
この諺は、幕末の僧・釋月性に由来するようです。
月性は本願寺派妙円寺（山口県柳井市）の住職でしたが、
吉田松陰・久坂玄瑞とも親しく、外寇を憂えて国防を叫び、
海防僧と親しまれ、共鳴者と共に多くの業績を残しました。

**略年表**（業績略）

- 一八一七年　〇歳　妙円寺にて誕生
- 一八二九年　十三歳　西本願寺で得度する
- 一八四三年　二七歳　『将東遊題壁』を作詩
- 一八五二年　三六歳　妙円寺の住職となり結婚
- 一八五八年　四二歳　妙円寺にて病死

両親や檀家の制止を振り切り、或る夜、
壁に漢詩を残して忽然と消えて、音沙汰もない。
どこぞで野たれ死にした… という破天荒さを想像しましたが、
寺内に塾を設ける等、檀家の信頼も篤く優等生でした。
情熱に任せた傍若無人の悪太郎でなくて少しガッカリです。

**将東遊題壁**　　将（まさ）に東遊せんとして壁に題す

男児立志出郷関　　男児志を立て郷関（故郷）を出ず
学若無成死不還　　学若し成る無くんば復た還らず
埋骨豈惟墳墓地　　骨を埋むる何ぞ墳墓の地を期せん
人間到処有青山　　人間至るところ青山あり

「男児立志の詩」として、勤皇の志士達に愛唱されたとの事。
真宗僧侶の「青山」ならば、弥陀浄土が連想できます。
恥も外聞も他人の迷惑も娑婆の内、私の志には大義がある。
別れる人とは浄土で邂逅するとして、今は存分に学び抜く。
娑婆内での「真の自由」は娑婆の外から齎されると学びます。

# 行事予定　～平成三十年春以降～

四月の月例会の開催日を変更しました、ご注意下さい。

**八月十五日（水）　お盆・歓喜絵(住職)**
法要・法話で亡き人を偲びます
軽食・花火あり
午後六時～

**九月二十四日(月・祝)　秋季彼岸・永代経法会(戸田恵信 師)**
お馴染みの先生の情熱的な法話です
お非時(昼食)あり
午前十時～

**十一月三日(土・祝)　本山納骨堂法会・団体参拝**
本山へ貸切バスにて団体参拝します
午前七時ごろ集合

**十二月一日(土)　報恩講(節談 祖父江佳乃 師)**
御開山聖人御恩に報いる法会です
お非時(昼食)あり
二日　午後一時半から
三日　午前十時から

**十二月二日(日)**

**五～十二月　毎月一日　月例会**
午後二時～　日時変更の場合があります、
寺までご確認下さい
九月以降には
念珠製作・絵手紙・他も
企画しようと思っています

**四月は二日に変更します**
**ご迷惑をお掛けします**

**花まつり**　　**於 豊橋別院**
四月九日　午後一時～　華展・茶会
十日　午前十時～　華展・茶会
十日　午後二時～　仏教講話
講題　供養の心
「よりよい人生を生きる為に」
講師　丸山宗皇 師

## ‡ 後記 ‡

○ **平昌オリンピックの感想**

開催自体危ぶまれた平昌オリンピックでしたが、各国選手の活躍の中、平和裏に閉幕しました。平和と思うのはＴＶがそのように放映したからで、一視聴者の私は無責任に感想を書いています。ドーピング疑惑をかけられた選手は、失意と闘争の中にいます。深刻な問題が多いからこそ、カーリング女子の爛漫さが眩しいのかも知れません。

○ **運がいいとか悪いとか**

スキーのジャンプは強風に翻弄されていました。不安定な自然の中で、競技として成立していないと思いました。それでも絶対王者はやはり強かった。

スケート・パッシュートで転倒に巻き込まれて敗退した選手があります。救済しなくて良いのだろうか？ 運が悪かったと諦めるしかないのでしょうか。

赤青のコースで競う場合、赤のコースの方が明らかにタイムが悪い。運が左右しています。「運も実力の内と」と選手は納得しているのでしょうが、私は憤ります。

でもよく考えると、運に左右されたとしか思えない出来事は、日常生活の中でも沢山起きています。

○ **物語は観た人の中で紡がれる**

「観ている人に元気を届けたい」
「応援されて頑張れた、頑張る姿で応援したい」
選手たちのプロジェクトの成否は、メダルの色ではなくて、その姿に接した私達の共感に懸かっているのでしょう。
自ら求道者と名乗り、困難な道を拓いてきた小平奈緒選手。
「応援はプレッシャーでなく力だ」と痛みに耐えた羽生弓弦選手。
オリンピックを目指した沢山の選手達。
美しい物語に憧れて、私も美しく過ごしたいと願います。